

日 本 の 点 字

第 40 号

目 次

点字と私	坂井 仁美	…	1
日本における英語点字の表記について	日本点字委員会	…	6
小学校の教科書で点字はどう扱われているか	加藤 三保子	…	17
図書紹介	金子 昭	…	23
点字関係文献目録（その15）			31
日本点字委員会第51回総会並びに研究協議会報告			36
編集後記			38

2015年12月

日 本 点 字 委 員 会

点字と私

日本点字委員会委員

愛知県立岡崎盲学校教諭 坂井 仁美^{ひとみ}

今では作られなくなった仲村製の木製点字盤。私は三つ持っている。古い二つは、父の形見と母の形見。三つ目は、盲学校に転勤した記念に購入した18年前のものである。

今回、金子副会長から「日本の点字」の巻頭言をと言われたときには、正直驚いた。しかし、自分の点字への思いを整理する機会になればとありがたく思い、私的な部分が多いことを恐縮しつつ、少し述べさせていただく。

私の実家は、三重県伊勢市の外宮近くの商店街の端にある治療院である。両親は、二人とも点字使用者だった。父は6、7歳の頃、母は姉と私を出産した後に完全に失明した。盲学校ではきの免許を取得した父は、鍼灸治療院を開業し、朝から夜中まで患者さんの治療をして私たち姉妹を育て上げてくれた。

幼い頃の私は、父の治療院のお弟子さんたちによく遊んでもらった。お弟子さんたちは盲学校の生徒で、点字使用者だった。その頃、家には、墨字よりも点字の書物の方が多かった。そういう環境に育ったと話すと、点字の読み書きは小さいときからできたのだと勘違いされるが、そのような環境では、点字よりもむしろ、墨字を読めることを必要とされた。他の人に見てもらいたくないような銀行や役所からの書類など、小さいときから漢字仮名交じり文を読み慣れていたように思う。それが国語科の教員につながったかもしれない。

名古屋盲学校に赴任して初めて担任したクラスで、まだ点字の分かち書きもおぼつかない私は、ある生徒の提出物にあった固有名詞と普通名詞での敬称の切れ続きの違いを、その生徒に何気なく尋ねた。生意気盛りの中学生は、胸を張って「ぼくは日本点字表記法のとおりにやっています」と答えた。私は非常に悔しく感じ、そこからが点字表記法との本格的な関わりになったと思う。教員の点字の誤りを指摘してくれる生徒がいることは、教員にとってこの上もない学びの環境である。最近、盲学校教員の点字の力について疑問の声が寄せられていることを聞くが、教員にとって最大の学び

の動機付けは、生徒の言葉だと考えている。この生徒は今、普通高校の教員として立派な活躍をしており、私の自慢の教え子の一人である。私がこの話を出すたびに「もうやめてくださいよ」と苦笑いするが、私にとっては感謝をしてもしきれないことと思っている。

今、私は、点字について三つのことに関わっている。どのようなモチベーションで向き合っているか少し書かせていただき、自分の整理としたい。

1 文部科学省著作点字教科書編集

今年度は小学校の教科書が改訂された。来年度は中学校の教科書が新しくなる。小学校の4教科、中学校の5教科は、文部科学省著作の点字教科書がある。この点字教科書の国語に、編集協力者として関わっている。

近年の墨字教科書は、「視覚の特性を駆使」した教科書である。フォントや文字サイズ・文字飾り・多様なレイアウト等で、ページ全体を見渡すと大切なことや全体の構成が一目瞭然にわかる工夫（学習効果が上がる工夫）がされている。ちょうどパソコンでインターネット検索のYahoo!の画面を見るように、ビジュアルな多量の情報を一目で取り込むことができ、自分に必要な情報を取捨選択できる。墨字使用の児童・生徒は、そのような教科書を使った学習に慣れてきている。

一方、点字はすべて同じ文字サイズで横書き、フォントも変えられない。文字飾りや色分けもできない。そのため、点字教科書では、「触読の特性を基本」にした編集を加えている。点字で学習する児童・生徒が指で一マスずつ触りながら点字を読んだときに、少しでも学習しやすいようにするためである。書き出し位置や囲み線、囲み符号・関係符号、ナンバリング、レイアウトの変更等で、学習の順序・全体の構成を示す工夫をしている。それによって、題材ごとのねらい、ひいては教科の学習目標がより効率的に達せられるようにと願っている。

2 全国高等学校長協会入試点訳事業部

全国高等学校長協会入試点訳事業部は、尾関育三先生おせきいくぞうの「点字で学習してきた人が全国どこでも自分の力を出し切れる点字試験を受けられ、その解答も正確に墨訳され、学力を正當に評価される」という願いから発足した。その運営協力委員として、模擬試験や各種試験の点字化、国語の教科に関しては点字問題にするためのアレンジ等に協力している。

ここでの私のモチベーションは、「点字での受験者が実力を正当に評価されるような点字問題にすること」に尽きる。盲学校の試験では点字化を前提で問題を作成するが、一般の試験では当然のことながら点字化することは全く考慮されていない。依頼によって点字化する性質上、問題そのものを勝手に変えることはできないが、依頼者と協議の上で、点字で解ける問題、点字で答えられる問題にしている。

特に国語科の問題では、漢字の書き取り、図や絵を見て答える問題など、言い換えや置き換えをすることによって、問題の主旨に沿ったアレンジを加えている。また、点字で答えられる問題であっても、テストで試されている力（学力）にポイントが絞れるよう、問題の形を変更するなどの大幅なアレンジを加えることもある。

最近の問題傾向として、たくさんの文章を読み、その中から必要な情報を的確に取り出して解答するというものも多い。限られた時間で解答する試験では、点字による受験者は非常に不利である。墨字問題と同じようなレイアウト・配列では答えにくい問題では、問題を解く思考の順序に従ったレイアウトにして、少しでも解答時間を減らすような工夫をしている。また、問題を解くために必ずしも必要ではないが、視覚的にイメージしやすいように添えられた図も、触図にかかる時間を考慮して思い切って削除することもある。

3 日本点字委員会

3年後の表記法改訂に向けて、少しずつながらも現行表記法の検討が進んでいる。日本の点字表記には、先賢たちが努力を重ねてきた長い道のりがある。その道の片端を歩けることの幸せを感じている。

言葉が世につれ時代につれ変わることは周知の事実だが、墨字の表記も特にこの十数年で多彩かつ多様になってきた。電子メール等の電子情報の普及も要因であろう。点字表記と墨字表記、点字そのものの表記と点訳。点字が誰のものか、どうやって読むかを常に忘れずに、点字表記の可能性を探っていきたい。

昨年4月、私は高等部普通科1年生のA君の自立活動の担当となり、点字を教えることとなった。A君は、一昨年9月に盲学校中学部に転校してきた。それまでは地元の中学校に通い、足の速いのが自慢で制服のズボンをちょっとずり下げてはくようなごく普通の中学生だった。急に視力が落ちて墨字では学習できなくなり、盲学校に転校してきたのだ。

転校してすぐの中学部での半年間で、A君はゆっくりながらも点字の触読ができつつあった。書く際はパーキンスタイプを練習していた。しかし、まだまだ「点字を」学習する段階で、中学3年の教科を「点字で」学習する段階には当然のことながら至っていなかった。

高等部に入學してすぐ、まだ自立活動の授業も始まっていない頃の昼休み、「点字盤で書けるようにならなければだめだって友達から言われた。」と彼が早口で言った。最初は、「だめだ」と言われたことを愚痴っているのかと思った。しかしそうではなく、点字盤で書きたいらしい。「まだ全然あせることないけど、点字盤貸してあげるからやってみる？」と応じると、彼は少し口角をあげながらうなずいた。私は急いで職員室に点字盤を取りに向かった。

墨字から点字に転向する決心は、A君の年頃では特に辛い決心であろう。そのため私は、点字を無理強いすることは決してするまいと考えている。教員というのは教えたがり屋で、無理強いするつもりはなくても、結果として強制的にさせてしまうことが多々ある反省からだ。幸い、A君の素直な性格と中学部の先生方の支援のおかげで、彼は思いの外抵抗なく点字に取り組んでいることがわかった。といっても、彼の内面はまだわからないが。

職員室から点字盤を抱えて戻った私は、「これ、私の愛用の点字盤。とても書きやすいから特別に貸してあげる。それにこの点筆、1600円もしたんだけど使いやすいから」と息をはずませながら手渡した。彼は笑いながら受け取ったが、「紙の挟み方わからない」と答えた。私は、昼休みの終わりのチャイムを気にしながら紙を挟んだ。A君に貸したのは、私の三つ目の点字盤だ。一番新しいので書きやすい。A君の手に自分の手を添えながら点筆の持ち方やマスの中の点の位置などを伝えた。一マスに六つの点を入れることもままならないまま、昼休みは終わった。

いつのまにか月日がたち、A君が教室で軽やかな点筆の音を響かせている。国語の授業では、ノートも当たり前点字盤でとっている。今の私は盲学校で、点字を学習する支援をしながら点字で学習する生徒たちと一緒に日々を過ごしている。生徒と一緒に校庭の花の香りを愛でたり、視覚を使わないでもできる手立てをあれこれと考えたりしている。両親と過ごした日々を思い出しながら。両親が私の今を形成し、盲学校の生徒さんたちが私の今を支えてくれているのだ。点字に関して身に余る仕事をいただいている。けれども、「盲学校で生徒とともに」それが自分の居場所である。この居場所があるから、点字と関われるのだ。

点字盤で点字を書くことは、最近では日本点字委員会の総会でもほとんど見られなくなりました。皆が便利で効率的な電子機器を使用するのは、必然のことである。でも、教室では当たり前点字盤でノートをとって学習している。仲村製の三つの木製点字盤は、私にこのことを忘れないよう教えてくれている。

生徒が学びやすい点字教科書、生徒が実力を出せる点字試験。生徒が自分の文字として当たり前点字を読み書きすること。それを自分の願いとして、これからも点字に関わらせていただけたらありがたい。

日本における英語点字の表記について

2015年9月1日

日本点字委員会

はじめに

英米を含む英語圏8カ国では、点字の表記法を統一英語点字（Unified English Braille : UEB）へ移行する取り組みが進んでいる。日本の英語点字は、長年アメリカ式の表記（English Braille American Edition : EBAE）に準拠してきた経緯から、日本での扱いが課題となった。

日本点字委員会は、2014年5月31日・6月1日の第50回総会において、UEBの日本への導入に関わる問題点を討議し、その後1年間、日本での表記をどのようにするかの詳細を検討するため、英語点字特別委員会を設置した。同委員会は、2014年11月30日と2015年3月30日の2度に分けて答申を提出し、その内容は2015年1月9日の日点委委員による書面表決と、2015年6月6日・7日の日点委第51回総会において承認された。この冊子は、その決定内容を周知するため、日点委が編集・発行するものである。

視覚障害教育や点字による情報提供等に携わる皆様には、この趣旨をご理解の上、今後の活動に生かしていただくようお願いものである。

概要

UEBは、従来の英語点字の表記（EBAE）と比べ、多くの点で差異が見られる。縮約（略字）のうち9つが廃止されたほか、カッコなど記号類の一部も変更され、数符や二重大文字符など指示符類の有効範囲に関する規則も一部変更された。

日本においては、英語の教科書等に英語点字が不可欠なことはいうまでもないが、一般の日本語文章中にも略称、英単語、ローマ字書きされた日本語、造語など、アルファベットが溢れている。これらにUEBを無条件に導入すれば、大きな混乱を招きかねない。特に、すでに学校を卒業し、英語とはほとんど無縁の生活を送っている多くの点字使用者への影響は、できるだけ小さくすべきである。

そこで、日本における英語点字の扱いを大きく2つに分け、「英語の教科書・試験

問題等」には原則としてしかるべき時期より UEB を導入するが、「一般日本語文章」には UEB を原則として導入しないこととする。

『日本点字表記法 2001年版』1編2章3節14.の一部と、4章5節4.の一部は、以下のⅠ・Ⅱ.それぞれにおいて変更が必要となる。また、Ⅰ.に関連して『試験問題の点字表記 第2版』の一部の項目にも変更が必要となる。

なお、『日本点字表記法 2001年版』1編2章3節9.・10.・11.・12.・13.の各項に記述されている、外文字に導かれるアルファベットや記号の表記については、以下のⅠ.・Ⅱ.いずれにおいても、まったく変更されることはない。

Ⅰ. 英語の教科書・試験問題等へのUEBの導入について

1. 導入範囲

英語圏各国の UEB 採用の動きに対応するため、日本においても、英語を学び英語で読むための点字資料については、しかるべき時期から UEB を導入する。具体的には、英語の教科書や参考書、英語の試験問題、専門書中に引用される英語の論文や英語の文献リストなどが対象となる。

ただし、UEB は従来の英語点字の表記 (EBAE) と様々な点で差異があるので、特に学校教育において生徒が試験などで不利にならないよう配慮が必要である。

2. 導入時期

具体的な導入時期については、中学校・高等学校の教科書の改訂時期に合わせ、次のようにする。

- ・中学校1～3年用教科書等 — 2016年4月から
- ・高等学校用教科書等 — 2017年4月から学年進行で
- ・大学入学試験 — 2020年4月入学の試験から

上記以外の資料についても、読み手の状況等を勘案し、上記の各導入時期に準じて導入時期を判断する。

《注意》

中学校の教科書は1～3年用が一斉に改訂されるが、高等学校の教科書は「学年進行」で改訂が行われる。すなわち、高校1年用は2017年4月から、2年用は2018年4月から、3年用は2019年4月からとなる。

2016年4月に高校に入学する生徒は、2019年3月の卒業までずっと改訂前の教科書で学習することになるので、本人が意識的に勉強しないかぎり UEB を知る機会がないことになる。すでに社会人になっている人たちも同様で、これら「UEB 以前の世代」の人たちへの配慮は特に重要である。例えば、4年制大学卒業者を対象とする就職試験の場合、2023年4月入社試験までは原則として UEB の導入は避けるべきである。

また、各種資格試験等、受験者の学年（年齢）が特定しにくいものに関しては、上記の教科書の改訂時期等を参考に導入時期を判断するとともに、UEB 導入の告知を実施の1年以上前から行い、受験者に十分な準備期間を与えること、そして UEB 導入後一定期間は、UEB と EBAE のいずれも受験者が選択しうる体制を可能なかぎり整えることが強く望まれる。

UEB の導入対象となる点字図書・資料を製作している出版所・施設・団体等においては、読み手の多様な状況に鑑み EBAE のニーズも相当期間なくなることを念頭に置きながら、人材育成や仕事の分担などをご検討願いたい。UEB について読み手への情報提供を行いつつ、EBAE と UEB が並行して使われる時期を経て、無理のないペースで UEB に移行していくのが望ましい。

3. 読み手になじみの薄い記号類の使用は慎重に

UEB には書体に関する記号、矢印記号、図形記号、数学・理科記号など、多種多様な記号が定められているが、それらが無制限に使用するのではなく、読み手の知識や必要性などを考慮し、シンプルで分かりやすい表記を心がける。また、読み手にとってなじみの薄い記号を用いるときは、巻頭の凡例で解説するなどの配慮を行う。特に、UEB 移行後当分の間は、図書・資料の巻頭に、その図書・資料中に現れる記号類のうち UEB で変更されたものの一覧を掲載するなどの配慮が大切である。

4. 試験問題等に用いるカッコ

UEB では、カッコ類の点字記号が大きく変わり、丸カッコは $\text{⠠} \sim \text{⠡}$ となった。従来は英語でも日本語でも $\text{⠠} \sim \text{⠡}$ という共通の記号であったが、UEB ではまったく違う記号のため、日本独自の規則として次のように表記する。

日本語の交じった英語の教科書や参考書、試験問題においては、(1)、(2)……、(a)、(b)……、(ア)、(イ)……などのナンバリングのカッコに UEB 中でも $\text{⠠} \sim \text{⠡}$ を

使用できることとする。これは、日本語と英語の両方に共通に使えるカッコの記号が必要なためである。このカッコ内は点字仮名体系とし、アルファベットには外文字を前置する。

また、英文中の日本語を囲むカッコとしても、⠠～⠡が使用できるものとする。

⠠は UEB ではプライム（'）を表すが、前後の文脈から誤読のおそれはまずない。

なお、英文中のナンバリング以外のカッコについては、UEB の記号をそのまま用いるものとする。

5. 試験問題等に用いる指示符、空欄符号

教科書や参考書、試験問題で下線部等を表すには、これまで第3指示符の変形⠠⠠⠠～⠠⠠⠠または第2指示符の変形⠠⠠⠠～⠠⠠⠠を用いることとされていたが、UEB では語頭の縮約（略字）com が廃止されたこと、UEB のダッシュ（—）⠠⠠がこれらの指示符の閉じ符号の1・2マス目と同形であることから、普通の第3指示符⠠⠠⠠～⠠⠠⠠または第2指示符⠠⠠⠠～⠠⠠⠠を使用するよう規則を変更する。

一方、空欄符号については、これまでどおり⠠⠠⠠⠠⠠を使用して差し支えない。

6. 『日本点字表記法』で読み替えを要する箇所

英語の教科書・試験問題等に UEB を導入するのに伴い、『日本点字表記法 2001年版』の次の箇所は読み替えが必要となる。（EBAE で表記している間は、従来どおり表記する。）

1 編2章3節14. （アルファベットで書き表された語句や文の引用） 〈引用される語句や符号が英語の場合にはその原語の表記法に従って書き表す。〉

→ 〈英語の教科書・試験問題等の英語の表記は、統一英語点字（UEB）による。〉

〈ドイツ語やフランス語などの場合にも英語の表記法に従うことを原則とし、変母音やアクセント符が付いた文字を含む語句が文中に出てきた場合には、該当する文字にアクセント符を前置して書き表すが、目的と必要に応じてその原語の表記法に従って書き表してもよい。〉

→ 〈英文中のドイツ語やフランス語なども UEB の表記法に従うことを原則とし、変母音やアクセント符が付いた文字を含む語句が文中に出てきた場合には、該当する

7. 『試験問題の点字表記』で変更を要する箇所

UEB の導入に伴い、『試験問題の点字表記 第2版』は、次の項目に変更が必要となる。(EBAE で表記している間は、変更は不要である。)

(1) 点字表記の基本原則を示した1部1章1節の(5)は、準拠する表記法をEBAE からUEB に変更。

(2) 第3指示符の変形について記述した1部1章5節1.(1)b.の後段と、1部2章2節2.を削除。

(3) 英文中の仮名文字の記号に関する1部2章2節4.の記述は、記号を⠠～⠡で囲む「原則」のみを残し、「仮名にピリオドを付けるだけで用いてもよい」とする例外は、UEB 中では仮名をアルファベットと誤読するおそれが高いため削除。

(4) 英文中の注記号に関する1部2章2節5.の記述は、UEB の規則に従い、アステリスクを⠠～⠡から⠠～⠡に変更。また、「注記号がダッシュを除く句読符の前にある場合には、句読符の後に書く」とする記述を削除。

(5) コーテーションマークに関する1部2章2節6.の記述は、UEB の規則に従い、最も使用頻度の高いコーテーションを形にかかわらず⠠～⠡で表し、それ以外のコーテーションはシングルを⠠～⠡、ダブルを⠠～⠡で表す旨変更。

(6) to, into, by の縮約(略字)の廃止に伴い、1部2章2節7.の一部と8.を削除。

(7) 単語の一部に付された下線などに関する1部2章2節10.は、⠠～⠡をナンバリングまたは日本語を囲むカッコとしたことに伴い、下線などを表す記号は⠠～⠡のみとする旨変更。

Ⅱ. 一般日本語文章中の英語の語句や文の表記について

1. 基本的考え方

現在、日本の点字使用者の大多数はUEB の知識を持たず、従来のアメリカ式英語点字表記(EBAE)に慣れ親しんでいる。今後、中学校・高等学校用の英語の教科書等にUEB が順次導入されていくとしても、当分の間この状況に大きな変化はないと考えられる。

また、使用頻度の比較的高い記号のうち丸カッコやドル記号、イタリック符などは、EBAE とUEB で形態が大きく異なっており、たとえ外国語引用符中であっても

このような UEB の記号を一般日本語文章中に用いることは、多くの読者に混乱をもたらす懸念がある。

このような事情に鑑み、一般日本語文章中の英語の語句や文については、原則として UEB は導入せず、EBAE（2008年版）に準じた表記とする。

ただ、EBAE の記号類も数が多く、中にはアットマーク (@) ㊦㊦がアクセント符の付いた a と同形というように、文脈での読み分けが必要なものもある。そこで、一般日本語文章中で使用できる英語の記号類は基本的なものにシぼることとする。

また、二重大文字符や数符の用法については、UEB の方が EBAE より明確に整理されており、日本語点字の書き方にやや近い部分もあるので、これらは UEB の規則を準用することとする。

一方、英語を学び英語を使う点字使用者は、今後 UEB を徐々に習得していくことになる。このような人たちにとって、使用できる記号類の制限や二重大文字符・数符の用法に関する特例は、UEB の表記と一般日本語文章中の英語の表記との差異をあまり大きくしないという意味で利点がある。

2. 対象となる文章の範囲

いわゆる一般日本語文章がその範囲となる。これは、前記 I. の「英語の教科書・試験問題等」以外のものということになる。具体的には、娯楽のために読む図書・雑誌に出てくる英単語、アーティスト名や曲名、イベント名、ブランド名など、教養書・実用書中の用語に添えられる英単語や著者が参考にした文献名、小・中・高校の教科書のうち英語以外の科目のものに出てくる英語の語句や人名、ローマ字で書かれた日本語などは、下記 4. に従って書き表す。

3. 実施時期

この表記規則の一部変更は、中学校用の英語の教科書等に UEB を導入する時期に合わせ、2016年4月から実施する。

4. 表記の実際

一般日本語文章中に改行または外国語引用符により挿入される英語の語句や文は、次のように表記する。

(1) アルファベット (a ~ z) と数字 (1~0) は、従来どおり ⠠~⠡、⠢~⠦、⠧~⠬、⠮~⠲、⠴~⠸、⠺~⠼、⠾~⠿ を使用する。一般日本語文章中はグレード1 (フルスペル) のみとし、グレード2は用いない。

(2) 使用できる記号類は、原則として次のものとする。

◆句読符類

⠠	,	コンマ
⠡	;	セミコロン
⠢	:	コロン
⠣	.	ピリオド
⠤	!	感嘆符
⠥	?	疑問符
⠦	'	アポストロフィ
⠧	-	ハイフン
⠨⠨	—	ダッシュ
⠨⠨⠨	. . .	点線
⠨⠨	/	斜線
⠢~⠣	()	丸カッコ
⠢⠣~⠢⠣	[]	角カッコ
⠢~⠣	“ ”	コーテーション
⠢⠣~⠢⠣	‘ ’	シングルコーテーション
⠨⠨	&	アンドマーク

◆点字に特有の記号

⠨	数符
⠠	大文字符
⠠⠠	二重大文字符
⠨	文字符
⠠	アクセント符
⠨⠨	終止符

なお、小数点については (5) を参照。

UEB の書き方に従い、ピリオド⠠.を用いる。

[例]

35-40 ⠠3⠠5⠠-⠠4⠠0 → ⠠3⠠5⠠⠠-⠠4⠠0
9:15 ⠠9⠠:⠠1⠠5 → ⠠9⠠⠠:⠠1⠠5
1/2 ⠠1⠠/⠠2 → ⠠1⠠⠠/⠠2
2015/2016 ⠠2⠠0⠠1⠠5⠠/⠠2⠠0⠠1⠠6 → ⠠2⠠0⠠1⠠5⠠⠠/⠠2⠠0⠠1⠠6
'15 ⠠'⠠1⠠5 → ⠠'⠠1⠠5
15,000 ⠠1⠠5⠠,⠠0⠠0⠠0 → ⠠1⠠5⠠⠠,⠠0⠠0⠠0 (変更なし)
3.14 ⠠3⠠.⠠1⠠4 → ⠠3⠠⠠.⠠1⠠4

数符の効力は、数字に読めない文字やコンマ・ピリオド以外の記号が表れたところで終わることとなるので、数字から文字への切り替えを示す文字は、数字の直後（あるいは数字の後のコンマまたはピリオドの直後）に小文字の a ~ j が続く場合にのみ必要となる。

[例]

8cm ⠠8⠠c⠠m → ⠠8⠠⠠c⠠m (変更なし)
8km ⠠8⠠k⠠m → ⠠8⠠⠠k⠠m
8B ⠠8⠠B → ⠠8⠠⠠B
8-cab ⠠8⠠-⠠c⠠a⠠b → ⠠8⠠⠠-⠠c⠠a⠠b
8. a ⠠8⠠.⠠a → ⠠8⠠⠠.⠠a

(6) 一般日本語文章中にドイツ語やフランス語などの語句や文を書く場合も、英語に準じ上記により表記することを原則とし、変母音やアクセントの付いた文字はアクセント符⠠˙を前置して示す。ローマ字書きされた日本語も同様に、長音にはアクセント符を用いる。

5. 『日本点字表記法』で変更を要する箇所

一般日本語文章中の英語の語句や文の表記については、上記4. に述べたようになるため、『日本点字表記法 2001年版』の次の箇所は、大幅な変更が必要となる。

1編2章3節14. (アルファベットで書き表された語句や文の引用) (引用される語句や符号が英語の場合には……長音は該当する母音にアクセント符を前置して書き表す。)

また、[例]のうち3・4番目は、一般日本語文章中ではアクセント符を用いた書き方 、 のみ該当し、ドイツ語点字・フランス語点字の表記は該当しない。

【注意1】から【注意3】については、変更を要する部分はない。

4章5節4. (点字仮名体系における外国語)の項は、本文の記述はそのまま生きるが、【注意】については一般日本語文章中の英語の語句や文には該当しない。

2編Ⅲ 5. 「英語(グレード1)」の表のうちアルファベット以外の部分は、本資料Ⅱ. 4. (2)の表(p.13)と差し替える。

《参考文献》

UEBについては、次の資料が参考となる。

The Rules of Unified English Braille Second Edition 2013. Edited by Christine Simpson, International Council on English Braille (www.iceb.org よりダウンロード可)

『エッセンシャルガイド 統一英語点字 UEB で何が変わるか』福井哲也著、日本ライトハウス、2015年

『統一英語点字(Unified English Braille)について』東京点字出版所編、2015年
(筑波技術大学点訳ネットワークのウェブサイト
www.ntut-braille-net.org/topics/H26_braille_training.php
からダウンロード可)

小学校の教科書で点字はどう扱われているか

日本点字普及協会 加藤 ^{みおこ}三保子

はじめに

私たちが小・中学校で点字の体験などを担当すると、いろいろな質問を受けます。点字のしくみや、どうしてボランティア活動を始めたのかなどの質問が多いのですが、なかには、「凸字の実物はどこで見ることができますか?」「結び文字はどのように読むのですか」など、思わぬことを聞かれて、答えに窮した経験をされた方も多いのではないのでしょうか。

小学生は「点字」やその周辺のことをどのように学んでいるのでしょうか。それを知るために、点字が小学校の教科書でどう扱われているのかを調べてみました。

あわせて、視覚障害に関する教材についても調べてみました。

調査方法

現在発行されている小学校・中学校の教科書をできるだけ多く見るために、東京都新宿区・中野区・渋谷区・杉並区に教科書の供給を行っている「第一教科書」(東京都新宿区百人町1-22-20)に行き、店頭に並んでいる小・中学校の教科書を全て調べてみました。

調査を思い立ったのは、2015年3月で、その時期に調査できるのは2014年度までに使用していた教科書でした。調査結果をまとめ、2015年4月に行われた日本点字普及協会の総会で発表しましたが、ちょうど、2015年度は小学校の教科書改訂の時期に当たり、総会直後に2015年前期の教科書を、9月に2015年後期の教科書を調査することになりました。

結果的に、教材の変化、点字の取り扱い方の変化も見ることができました。

調査結果

1. 「点字」の教材がある「小学国語 四年」

点字が採り上げられているのは、主に4年生の国語で、調査した範囲では、次の4社の教科書でした。

光村図書『手と心で読む』(大島健甫^{けんすけ}): 作者自身の経験を語りながら、点字のしくみ、点字の役割、点字を触読する苦勞と喜び、視覚障害者の文字としての点字について紹介されています。本文のあとの「もっと調べる」では、それぞれの課題を深めることを目標に身近な点字表示について調べた例が挙げられています。エレベーターの点字表示、自動券売機、点字の本、点字を読んでいるところ、点字一覧表(清音・濁音・数字、「カラマツノ■ハヤシヲ■スギテ」の点字の例)、点字を打つ道具(標準点字器)、点字を打っているところ、音声拡大読書器(「印刷された文章を、音声で読み上げたり、画面に大きくうつしたりすることができる」の説明)、立体コピー機(「特別の用紙を使う。図や絵や点字などがうき上がってコピーされる」の説明)のイラスト・写真が掲載されています。

『日本の点字 第21号』(1996年2月発行)に「小学校の国語教科書に点字についての説明文がのる」として、光村図書発行「国語四上・かがやき」に『手と心で読む』が載ることになったと紹介してあります。引用された文も現在の教科書と同じです。そして挿絵として、駅の券売機に貼られている点字の料金シールの写真と開いておいてある点字図書の写真、ア行・カ行・サ行の点字が凸面の墨点字で紹介されています。現在は写真も多くなり、点字も凸面が浮き出て触って感じるようになるようになり時代を反映していますが、「文字を持つことの大切さ」を知る教材として、大切に使われていると感じました。

教育出版『「便利」ということ』(太田正己^{まさみ}): 本文には、耳の不自由な女性のチャイムに気づくための工夫や緩やかな勾配の歩道橋などが採りあげてあり、点字についての説明はありませんが、本文のあとの「ポスターを使って発表しよう」で、点字ブロックのある通路、点字のついた手すり、点字のついた券売機、触知図の案内板、音声触知図式案内板(「音声での案内とともに、さわると駅の中の配置がわかるようにつくられている。点字での案内もしめされている」の説明)などが紹介されています。「点字の表」があり、五十音・濁音・半濁音・数字と、点字のしくみが説明されています。そして、「実際の点字はここでしめたものよりも点のもりあがりが高くなります」と断りがあります。

三省堂『点字について知ろう』: これは教科書ではなく、「学びを広げる」という副読本ですが、『点字について知ろう』という項目があります。点字の紹介と「点字は、私たちの周りの、どんなところに使われているのでしょうか」との文があり、点字一覧表(五十音・濁音・半濁音・数字、「濁音や半濁音、数字などを表す場合には、濁音符^{だくおんぶ}、

はんたくおんぷ

半濁音符、数符を前に置きます。」の説明、「トモダチ」の点字の例)、点字を読んでいる人、エレベーターの注意書き、文字が浮き出た時計、曜日がわかる薬入れ、公園の案内板、歩行者用の押しボタンの写真が掲載されています。

改訂によって教材が変わったのが、学校図書四年下の教科書「みんなと学ぶ」です。

『さわっておどろく』(広瀬浩二郎)：視覚障害者が博物館を楽しむことに取り組む筆者の仕事やこれまでの体験を紹介し、《目の不自由な人を「しょうがい者」とよぶのではなく、さわることを得意とする人だととらえ直すと、目が見える人見えない人の関係は、「視覚にたよって生活する人」と「触覚にたよって生活する人」のコミュニケーションだということができ》るというユニークな論を展開しています。本文で点字について言及した部分は、筆者が盲学校に入学し点字を覚えた部分だけになっています。写真は、点字を指で読む様子、国立民族学博物館、海外で作品をさわる筆者、ルイ=ブライユ、民博の展覧会のポスター、さわるとんじの様子(青森県立美術館)、大きな仏像をさわる様子(吹田市立博物館)、毎年開かれている小学生向けの暗やみ体験(キッズプラザ大阪)が載っています。本文のあとには、「点字のかなと数字」の一覧表(清音・濁音・半濁音・拗音・拗濁音・拗半濁音・数字、「テンジロ■マナボー」の点字の例のほか、点字が六つの位置の点を組み合わせることによって文字を表していること、濁音・半濁音の書き方、「う」をのばすときの書き方の説明がある)、ユニバーサルデザインの例(シャンプー、ノンステップバス、多機能トイレ、エレベーター・エスカレーター・階段が並んで設置されている例など)が載っています。

この教科書は、昨年度までは、『点字を通して考える』(黒崎恵津子)という教材でした。本文では、点字の歴史が詳しく紹介され、ルイ=ブライユ、凸字、バルビエの十二点点字、小西信八、石川倉次、点字選定会議などの事柄が述べられていました。そして、ユニバーサルデザイン、身近な点字表示についての紹介があり、さらにこれらの装置や機器類・道具などのハード面だけでは足りないもの、「本当のやさしさ」とは何かについて述べられていました。視覚障害者の文字としての点字の大切さが小学4年生に向けた文章で書かれていました。ルイ=ブライユが「言葉を正しく書き表したい、数学も勉強したい、楽ふもほしい」と思って六点からなる点字を考案したこと、小西信八が生徒にローマ字で綴った点字を読ませたとき、「生徒の顔がぱっとかがやき、体中から喜びがあふれ出るのが分かったそうです」と紹介されていました。点字一覧表(現在のものと同じ)、ルイ=ブライユ、アルファベットの凸字(ムーンタイプ)、バルビエの十二点点字、ブライユの六点点字、石川倉次の点字案(第1回点字選

定会議に出された石川倉次案)、ユニバーサルデザインの例(現在のものと同じ)、石川倉次、身近な点字(缶ビール、エレベーター、振動型信号機の点字表示)と、多くの写真やイラストが掲載されていました。

個人的には、点字を最も詳しく、小学4年生に向けた文章で説明していたこの教材がなくなったことが残念に思われます。写真や資料も詳しすぎるのではという感じもありましたが、バルビエの十二点点字、ルイ=ブライユの六点点字、石川倉次の点字案などが紹介されていました。現在の教材では、博物館の写真、彫刻を触る筆者、彫刻が展示されている様子などで、点字には全く触れられていません。また、点字を指で読む様子も左手の人差し指1本で読んでいる写真が載っており、他の教科書の写真と比較しても不自然で、これが標準的な触読の様子と誤解されないかと心配になりました。さらに、これは教育的なことなのか、「視覚しょうがい者」「観らん」「てんじ物」「役わり」「てんらん会」「特ちょう」など以前と比べて交ぜ書きが多く気になりました。

2. 「点字」の教材がある「中学生の国語」「中学英語」

このほか、中学校の教科書にも点字が見られました。

三省堂「中学生の国語 学びを広げる一年 資料編」の『様々な伝え方』に手や指を使う言葉として手話、点字と、身振りで伝えるとして、手を振っての挨拶、交通整理、野球やサッカーの審判が紹介してあります。そして触読の様子と「点字はさわって読む文字(言葉)です。」との説明があります。触ってわかる案内表示、豆腐の容器、ホイルの箱についての点字、料金表、点字ブロック、点字の書き方(読む面と書く面)、点字器とパソコン点訳の写真が掲載されています。「コンピューターで点字の文書を作り、点字プリンターで出力することもできます」との説明が載っています。

東京書籍「NEW HORIZON English Course 3」の「Sign Language」の「Review」にアルファベットの点字と仮名の点字「c a r」「くるま」が載っています。問題は「あなたは点字(braille)について調べました。次の本の内容をもとに、下線部に語を入れて図解の英語を完成し発表しましょう。点字では、文字を表すために6つの点が使われています。たとえば次の図1は「c a r」を表しています。また点字で日本語の仮名を表すこともできます。図2は「くるま」を表しています。」

3. そのほかの国語教科書

点字を扱っている教材は以上ですが、国語の教科書には視覚障害に関する教材が見られます。

学校図書「みんなと学ぶ 三年上」『合図としるし』: 本文に「道路のあちこちには、自動車や歩行者にむけた道路ひょうしきや点字ブロックなどがあります。どれも、みんながあんぜんに通行できるようにするためのもので、それぞれ形や絵がらがきめられています。」とあり、点字ブロックのある風景の写真が掲載されています。道路標識、地図記号などの役割を学ぶ中の一例として挙げられています。

東京書籍「新しい国語 三下」『もうどう犬の訓練』: 本文では盲導犬の役割、訓練の様子が詳しく紹介してあります。そして訓練を終えて使う人と一緒に暮らす盲導犬について、「目の不自由な人にとってもうどう犬は体の一部であり、心の通う家族なのです」と結んであります。

三省堂「中学生の国語 一年」『ユニバーサルな心を目指して』(三宮麻由子^{さんのみや まゆこ}): 「バリアフリー」とか「ユニバーサルデザイン」といった美しい横文字が世間をいどっているが、その中味はどうだろうかと問いかけている教材です。一部の人にだけ配慮してバリアフリーを謳っている施設、点字が付いているから、段差がないからそれだけでバリアフリーと誤ってしまっている中途半端な設備など、バリアフリーやユニバーサルデザインには、現状では「穴」がある。その「穴」を少しでも小さくする発想の転換が、バリアフリーやユニバーサルデザインを美しいカタカナ言葉から美しい手応えのある社会哲学へ変身させるカギではないかと述べられています。

4. 国語以外の教科書

小学1・2年生で学ぶ「せいかつ」には、「町たんけん」「まちでさがそう」などの単元があり、点字ブロック、信号の青延長用スイッチなどの写真があります。また、町のようにすを描いたイラストの中に白杖で歩く少年や盲導犬と一緒に歩く人が描かれています。

特徴的な教科書として、日本文教出版の「わたしとせいかつ」(上・下)があります。「もくじ」のページには触ると浮き出たところがたくさんあり、「モクジ」と点字が浮き出ています。また、「下」では最後のページに「点字にふれよう」の項目があり、公衆電話「カード■イリグチ」「カード■デグチ」、ポスト「テガミ・■ハガキ(コガタ■ユービンブツ)」、階段のすり「→ 2カイ」、エレベータ「アケ」「シメ」、自動販

売機「ヘンキヤク」(おつり返却)の写真とともに点字の部分が触って分かるようになっていました。

また、大日本図書の「たのしいせいかつ 下」には、最後のページに「手話や点字に挑戦」とあって「おはよう」「こんにちは」「さようなら」「ごめんなさい」「ありがとう」の手話と墨点字があります。2014年度版では、この点字に間違い(ウ列・オ列の長音、助詞の「は」)がありましたが、日本点字普及協会から修正をお願いしたところ、修正しますとの返事をいただき、2015年度版では正しい表示になっていました。

小学3・4年生の「社会」では「安全な町をめざして」「安全な暮らしとまちづくり」の単元に点字ブロックや音の出る信号機、「見直そうわたしたちの買い物」にスーパーマーケットのインターホンの点字案内の写真が見られます。また、店内の様子を描いたイラストの多くの買い物客の中に、盲導犬と歩く男性や女の子と一緒に買い物をする白杖を持った女性、店員の説明を受けながら買い物をする白杖を持った男性の姿があります。

おわりに

小学校、中学校の教科書を調べてみると、点字や視覚障害者について様々な形で取り上げられ、教科書によって工夫されているのを発見して楽しい作業となりました。

点字を扱った教材は、4年生の国語に集中していて、この改訂で点字の占める割合が少し減ってしまったことは残念です。また、点字の一覧表が4社の国語教科書にあり、昨年度はそのすべてが、触って分かるように凸面が出ていましたが、2015年度は三省堂の「学びを広げる」が、凸面をなくし、墨点字になってしまいました。高さや大きさの課題もありますが、触って読むということを感じ取れる教材ですので、残しておいてほしいと思います。

また、調査の中で、小学1・2年の「たのしいせいかつ 下」(大日本図書)に、点字のあやまりがあることが分かり、出版社に修正を申し入れたところ、2015年度の教科書から正しい表記になりました。このようなことにも調査をする意味はあるのかもしれない。

教科書は改訂されていきますので、今後も点字を中心に調査を続けて、小・中学校での点字体験を担当する際に活かして行きたいと思っています。

図書紹介

なかの・まき著

『日本語点字のかなづかいの歴史的研究

— 日本語文とは漢字かなまじり文のことなのか —』

(三元社、2015年)

日本点字委員会副会長 金子 ^{あきら}昭

1. はじめに

「あとがき」によると、本書は下記のような経緯で出版された。

《本書は、2014年に国学院大学に提出した博士論文『近代における墨字国語・日本語教科書と点字国語教科書のかなづかいの研究』を加筆・訂正したものである。(略) 本書の内容は、日本語点字を資料としてもちいた日本語文字・表記研究に位置づけることができるだろう。これまで、日本語点字がこのような研究の資料としてもちいられることはほとんどなかったといえるだろう。(略) 私は明治期から昭和の初頭までのかなづかい改定論について興味をもっており、「現代かなづかい」以前の表音主義的かなづかいについて調べていた。そのなかで、現行の規範的な表記として棒引きかなづかいを使用する日本語点字に興味をもったのは、ただたんに研究をおこなううえで、ごく当然の研究上の経緯であったからだとしかいいようがない。(略) そしてしらべていくうちに日本語点字はかな専用文であり文節わかちがきをもちいるという表記の特徴についてしるようになり、墨字漢字かなまじり文のみを研究しているのは、それは「日本語学」の「文字論・表記論研究」としてはかたよっているのではないかとかんがえるようになった。》(pp. 177～178)

このような動機から、著者は点字仮名遣いの研究を始めたのである。著者は博士(文学)で、執筆時の肩書きは国学院大学特別研究員である。

本書の構成、および内容を紹介する。

第Ⅰ部 日本語点字のかなづかい

「序章：本書の目的と概要」

本書は日本語点字を日本語文字・表記論研究の資料として調査を行った。日本語点

字の表記論研究としては、次のようなテーマが考えられる。①かな専用文による日本語表記論の考察のための研究資料としての日本語点字を研究する。②日本語分かち書きについての研究に、日本語点字資料を使う。③日本語文字・表記史という観点から、日本語点字は重要な資料群となる。本書は、日本語点字を日本語文字・表記論研究の資料として調査を行う。特に、明治期から昭和初期にかけての日本語点字のかなづかい史について、かなづかい改定論との関連を中心に考察している。折に触れて、その当時の墨字資料との比較を行う。

「第1章 現代日本語点字の表記の概要」

現在の日本語点字の規範的表記について、墨字のかなづかいの「よりどころ」となる「現代仮名遣い」との比較を行いながら説明する。日本語点字は、墨字とは共通点を持ちながらも、独立した文字・表記システムを持っているといえるだろう。

「第2章 日本語点字の成立とかなづかいの歴史」

日本語点字の成立と表記の歴史について概要をまとめている。点字表記史を4期に分け、各期に発表された点字表記法書を調査し、四つがな、長音など、仮名遣いの表記の変遷をたどる。

第3章および第4章において、実際の点字資料を用いてかなづかいの調査を行う。

「第3章 近代日本語点字資料『点字 尋常小学国語読本』のかなづかい」で、第3期国定国語教科書『尋常小学国語読本』を点字に翻字した『点字 尋常小学国語読本』のかなづかいを調査した。大正末期から昭和にかけて製作された点字教科書だと思われる。助詞の表記や、和語、字音語ともに長音表記には長音符「一」を用いるなど、現行の点字かなづかいと共通点が見られる。「第4章 近代点字新聞『点字大阪毎日』のかなづかい — 第1号から第25号までを対象として」において、点字の普及におおきな貢献をしたと考えられている同点字新聞のかなづかいを調査した。

第Ⅱ部 近代点字関連資料のかなづかい

第5章から第8章までは、日本語点字のかなづかいと近い表音的なかなづかいを採用していると思われる近代墨字資料のうち、まだ詳細なかなづかいの研究が行われていないものを取り上げた。「第5章 石川倉次著『はなしことば の きそく』のかなづかい」では、仮名文字論者であり、日本語点字考案者、石川倉次の著した口語文典のかなづかいを調査した。「第6章 『尋常小学読本』のかなづかい」では明治33年から8年間、表音的なかなづかいが用いられた第一期国定国語教科書、『尋常小学読本』を取り上げる。「第7章 松本亀次郎『言文対照 漢訳日本文典』のかなづか

い」で、清国留学生を対象とした日本語教材のかなづかいを取り上げる。「第8章 点字かなづかいと『棒引きかなづかい』」で、これまで取り上げた資料と点字かなづかいとの比較を行う。

第Ⅲ部 だれのための日本語文字・表記研究か

「第9章 点字かなづかいと『現代仮名遣い』」で、現在の点字かなづかいと墨字「現代かなづかい」との関連について考察を行う。「第10章 だれのための日本語文字・表記研究なのか」で、日本語学分野で日本語点字についてはどのように語られてきたのかを紹介しつつ、今後の日本語文字論・表記論研究において日本語点字はどのように位置づけられるべきか、考察を行っている。

「資料編：筑波大学附属視覚特別支援学校資料室蔵『点字 尋常小学国語読本』第2巻（一部抜粋）」は、同点字資料を写真により復刻し、併せてその墨字訳も示している。

2. 本書の特色

本書は、日本語点字資料を日本語文字・表記論の観点から精査し、そのかなづかいの歴史を明らかにし、「棒引きかなづかい」から「現代仮名遣い」に至るまでの日本語表記史における日本語点字表記の位置づけを考察している労作である。副題の「日本語文とは漢字かなまじり文のことなのか」は、《日本語点字と墨字は日本語をかきあらわすために平行して使われて》(p. 3) いるのであるから、日本語文は、目で読む漢字かなまじり文だけではなく、点字もあるよ、という著者の主張であろう。

実際の近代点字資料、および近代墨字資料を用いて分析した実証的な表記研究が提示されている。今まで日本における点字の研究としては、^{くさじまときすけ}草島時介を^{こうし}嚆矢とする点字触読、工学系の人たちによる自動点訳システムなど言語情報処理の分野、視覚障害教育関係者による点字指導法などの研究が行われてきた。しかし日本語点字資料を日本語文字・表記論の観点から精査し、その仮名遣いの歴史を明らかにしたのは、初めての業績だと思う。

関連資料として石川倉次『はなしことば の きそく』、『尋常小学読本』、松本亀次郎『言文対照 漢訳日本文典』の仮名遣いについて検討している。このことは、《これらの資料のかなづかいの共通点は、近代に刊行された歴史的かなづかいではなく（略）、長音表記に長音符「ー」を用いるいわゆる「棒引きかなづかい」でかかっているということ》(p. 113) を論証するためにも必要な作業であったと思う。

日本点字委員会でも、石川倉次『はなしことば の きそく』[きんこうどうしょせきかぶしきかいしゃ、1901（明治34）年8月]を取り上げたことがあった。木塚泰弘委員の国文法の恩師、辻村敏樹教授（早稲田大学）から紹介された。辻村教授は、「石川倉次は点字だけではなく、日本の口語文法の草分けとして評価されているのだよ」と、木塚委員に話した。同書が国語研究所にあることを知り、同研究所において全文のコピーを入手した。日本点字委員会の下澤仁事務局長（当時）も、「これは点字翻案者の著作として、絶対に復刻しよう」と張り切っておられた。しかし話を進めているうちに、「これだけを読んで点字の表記法と混同される心配があるのでは」という結論になった。いつしかその復刻の話は下火となり、他の点字関係資料も多く収集した『資料に見る点字表記法の変遷』の編集・発行のほうに関心が移っていった。そういう意味で『はなしことば の きそく』は、日点委と縁のある書物であるといえる。

3. 日本点字委員会についての言及

日本点字委員会との関係で本書を眺めてみたい。

まず次の記述がある。

《点字の表記法の基準となるものは、日本点字委員会によって定められている。日本点字表記法は、およそ10年に1度、みなおしがおこなわれることになっている。最近では、2001年におおきな改訂があり、『日本点字表記法 2001年版』（日本点字委員会編刊）がまとめられた》とあり、本文の《日本点字委員会》の語には、《1966年に発足した点字表記法の決定機関。》という脚注がある（ともにp. 12）。

《日本語点字は基本的にはかな専用文でかかれるため、文節わかちがきをおこなう。この文節わかちがき法は、基本的には学校文法の文節にもとづいており、一定の規範がある。日本語点字のわかちがき法は日本点字委員会で規定されている。具体的には助詞・助動詞は、自立語のあとにつづくという「分かち書き」と、自立語であっても名詞については、1語であっても3音節以上の意味のきれめでくぎるという「切れ続き」の規定がある。》（p. 14）

「日本点字表記法を区切る四つの時期」の第1期から第3期までを説明したのちに、
《第4期

1946（昭和21）年に、「現代かなづかい」が発表された。また、国定教科書が廃止され、1949（昭和24）年から検定教科書の使用がはじまる。それにともない、日本語点字表記の不統一が問題となり、全国的な統一と体系化がめざされた。1955（昭和30）年に京都府立盲学校を中心とした点字関係者によって日本点字研究会が発足し、全国の盲学校がこれに加入した。そして1959（昭和34）年に、『点字文法』が出版される。そして1966（昭和41）年に日本点字委員会へと発展する。それ以降、何度か点字表記法の改定はおこなわれ、現在の『日本点字表記法 2001年版』にいたる。》（p. 22）

「日本点字表記法を区切る四つの時期」については、日本点字委員会編集・発行『資料に見る点字表記法の変遷 — 慶応から平成まで —』（2007）に従っている。ほかにも著者は、同書から多くを引用している。

《盲学校の関係者を中心として組織されていた日本点字研究会は、日本語点字表記の統一のため、1966（昭和41）年に点字出版所や点字図書館関係者などもふくんだ新しい組織、日本点字委員会へと発展した。日本点字委員会は1971（昭和46）年に『日本点字表記法（現代語篇）』を出版した。ここで、「現代かなづかい」への言及があらわれる。また、実際のかなづかいも「現代仮名遣い」との共通点がふえていく。》（p. 30）

本書において日本点字委員会から国語審議会への意見書、要望書提出についてもふれているが、次項4. に譲る。

4. 日本点字委員会から国語審議会への意見書、要望書提出について

1982（昭和57）年以降、国語審議会では現代かなづかいの見直しに着手し、各方面から意見を募集した。そこで日本点字委員会は、1982（昭和57）年10月、点字使用者の立場から8項目にわたる「現代仮名遣いに関する意見書」を提出した。1985（昭和60）年2月、国語審議会から「改定現代仮名遣い（案）」が公表されたのを受けて、同年4月、「国語審議会への要望書」を提出した。

本書を見てみよう。

《「現代かなづかい」の改定にあたっては、日本点字委員会が『現代かなづかい』に関する意見書（1982）、および「改定現代仮名遣い（案）」に対する「日本点字委

員会からの要望」(1985)を国語審議会に提出している(略)。助詞「は」「へ」、よつがな、長音表記などの例をとりあげ、のこっている歴史的かなづかいの影響をなくし、より表音的な表記にちかづけていくための提言がされている。しかしながら国語審議会がだした「改定現代仮名遣い(案)」は、いままでの「現代かなづかい」とほとんどかわらず、日本点字委員会のもうしたてがまったくふまえられていない。また、「現代かなづかい」では助詞「は」と「へ」は「わ」「え」という表記も許容され、オ列長音の本則において「オ列+お」の表記も許容されている。これが点字かなづかいの「オ列+一」と対応しており、「オ列+う」を本則としない点字かなづかいとの整合性をたもつと解釈されているが、改定案ではその許容がなくなっているなど、点字かなづかいとの関連が希薄になっている。／それをうけて日本点字委員会(1985)は、「改定現代仮名遣い(案)」にたいして、2点の要望をだしている。1点は助詞「は」「へ」に「わ」「え」の表記の許容を存続すること、もう1点は、オ列長音の本則を「オ列+う」とすることにたいして、「オ列+お」の許容を存続することである。しかしながら、昭和61年内閣告示第1号として公布された「現代仮名遣い」において、まえがきに「7 この仮名遣いは、点字、ローマ字などを用いて国語を書き表す場合のきまりとは必ずしも対応するものではない」という一文が追加されたのみで、日本点字委員会の要望は反映されないまま、現在にいたっている。》(pp. 155~156)

日本点字委員会の要望にもかかわらず、改定された「現代仮名遣い」はそのような内容であった。要望が受け入れられなかったその代わりに(?)、「この仮名遣いは、点字(略)を用いて国語を書き表す場合のきまりとは(略)対応するものではない」という一文が追加された。

これを受けて日本点字委員会では、具体的な点字の書き表し方について検討した。その結果、助詞の「ワ、エ」、長音、連濁・連呼の表記は現在行われている点字の仮名遣いをそのまま踏襲することとし、その他のことについては「現代仮名遣い」(1986)と同じ表記を取るようになった。

「この仮名遣いは、点字(略)を用いて国語を書き表す場合のきまりとは(略)対応するものではない」という一文をめぐって、当時、点字の世界では二つの対応があったと思う。一つは、「助詞の『は、へ』を『ワ、エ』と表記する等の本会の意見具申は受け入れられなかったが、国語を表記する文字として『点字』が市民権を得たものとして評価する」という意見と、もう一つは、「喜ぶことは全然ないんだよ。点字は勝手にしろと突き放されただけじゃないか」という意見とであった。

5. 点字の位置づけ

《1980年刊行の国語学会編『国語学大辞典』では「点字」という立項があり、項目の筆者としては、草島時介の署名がある。(略)「(略) 点字は一種の隠語であり、常人にはわからない。盲人常人間において、排他結束性[金子注：自分たちだけで固まって、他を寄せ付けない、という意味か]という性格を醸成することは望まないことである。」／ここでは、「常人」と「盲人」という対比がおこなわれており、点字は「常人」にはわからない「隠語」であると評価されている。しかし、これは墨字視読者を基準とした価値判断であり、点字が墨字使用者にとってわからないものであれば、同様に墨字も点字使用者にとってはわからないものである。このように点字のみを「隠語」と揶揄するのはマジョリティである墨字使用者の一方的な都合である。》(pp. 163～164) と著者は言う。だとすれば、下記の文科省学習指導要領の「点字又は普通の文字」という表現も、《墨字視読者を基準とした価値判断》から来ており、似たり寄ったりだと筆者(金子)などは思うのだが…。

《文部科学省特別支援学校小学部・中学部学習指導要領／第2章 各教科／第1節 小学部／第1款 視覚障害者，聴覚障害者，肢体不自由者又は病弱者である児童に対する教育を行う特別支援学校／1 視覚障害者である児童に対する教育を行う特別支援学校／(2) 児童の視覚障害の状態等に応じて，点字又は普通の文字の読み書きを系統的に指導し，習熟させること。》

6. 終わりに

本書によって、従来、墨字資料のみで構成されてきた表記・仮名遣い史の研究に多様な表記の存在のあることが明らかにされた。本書は日本語学文字論・表記論の観点から、日本語点字の文字としての特徴や、表記の歴史を研究したものである。1900(明治33)年の「小学校令施行規則」により導入された明治33年式棒引き仮名遣いが、近代日本語教育および近代点字国語教育の仮名遣いに影響を与えていることを指摘している。

国学院大学の「中野真樹提出学位申請論文(課程博士)」には、論文の要旨を紹介したあとに、次のように記されている。

《全3部10章を以て構成された本論文に一貫する論者の姿勢は、日本語文字表記システムには視読文字である墨字と触読文字である点字があり、それぞれ独立した表記

史と表記法があるという認識に基づく現代の日本社会における書字・読字生活の多様性に対する認識である。

ただし、文字体系の考察にあたっては文字学の理論をさらに参照し取り込む余地があり、課題として残るものの、本論文によって、墨字資料のみで構成されてきた表記・仮名遣い史の研究に多様な表記の存在が明らかにされており、高く評価することができる。よって、本論文の提出者、中野真樹は、博士（文学）の学位を授与せられる資格があるものと認められる。」

なお金子は、『社会言語学』第15号（『社会言語学』刊行会、2015年11月発行）に、誤植の指摘、今後への提言も含めて、本書の書評を掲載していただいているので、併せてお読みいただけるとありがたい。

点字関係文献目録 (その15)

2014年9月から2015年8月までに刊行された点字に関する単行本や小冊子、各種論文、関係資料、社会福祉法人視覚障害者支援総合センターの編集になる「視覚障害—その研究と情報—」(No. 316~327)等に掲載された点字関係の文献を収録しました。

単行本・小冊子等

- 点字利用と読書に関するアンケート調査委員会 『点字利用と読書に関するアンケート調査報告書 — 点字利用者の読書意識、点字利用の実態を把握するために』 日本点字図書館 2014年10月
- 日本点字委員会編 『点字数学記号解説 暫定改訂版第3刷』 日本点字委員会 2014年10月
- 本間一夫と盲人用具50年展企画委員会編 『本間一夫と盲人用具の50年展 展示品リスト』 日本点字図書館 2014年11月
- 視覚障害者選挙情報支援プロジェクト「点字版選挙公報製作必携」編集委員会 編纂 『点字版選挙公報製作必携』 日本盲人福祉委員会 2015年1月
- 日本盲人社会福祉施設協議会点字出版部会 編著 『「点字版自治体広報誌」に関する実態調査報告書』 日本盲人社会福祉施設協議会 2015年1月
- 長尾博・畑中滋美著 『まねて覚える点図入門 — エーデルがひらく図形点訳の世界 —』 読書工房 2015年1月
- なかの・まき著 『日本語点字のかなづかいの歴史的研究 — 日本語文とは漢字かなまじり文のことなのか』 三元社 2015年1月
- 日本点字図書館 『日本点字図書館創業者 本間一夫の生涯 — 見えない人の「読めるしあわせ」を叶えるために —』 日本点字図書館 2015年3月
- 日本点字委員会 『日本の点字 第39号』(点字の存在に感謝 近代日本における点字楽譜の導入 日本における英語点字表記 塩谷治先生の思い出 塩谷治さんを偲んで 点字関係文献目録〔その14〕等) 2015年3月
- 小林雅子・石井薫著、筑波技術大学障害者高等教育研究支援センター障害者支援研究部(視覚障害部門) 監修 『英語点訳ガイド — textbook written by Braille transcribers — 改訂版2015』 筑波技術大学 2015年3月

- 全国視覚障害者情報提供施設協会編 『点訳資料校正基準 2015年版』 全国視覚障害者情報提供施設協会 2015年4月
- 日本点字技能師協会編 『点字技能検定試験の対策 過去問題（第15回）の正答と解説』 日本点字技能師協会 2015年4月
- 岩田美津子著 『点訳絵本の作り方〈増補改訂第4版〉』 せせらぎ出版 2015年6月
- 福井哲也著 『エッセンシャルガイド 統一英語点字 UEB で何がかわるか』 日本ライトハウス 2015年7月
- 田中徹二著 『不可能を可能に ― 点字の世界を駆けぬける』 岩波書店 2015年8月

研究誌等の論文

- 上野多美子 家電製品の点字サイン調査を行って 「視覚障害」No. 316 2014年9月
- 大村成子 表現活動を充実させるために ― 点字楽譜習得のための3年間の実践から 「視覚障害」No. 320 2015年1月
- 加藤俊和 幅広い点字への意見を集約し続けて40年 近畿点字研究会の歴史と触察に約100人 「視覚障害」No. 322 2015年3月
- 広瀬浩二郎 点字研究の最前線 ― 正しい点字と自由な点字 日本語学 33(11) 明治書院 2014年9月
- 点字表記法に基づく正しい点字だけではなく、点字表記の自由度を大切にしたいという考えを述べる
- 立花明彦 ハンセン病盲人と点字習得 ― 大島青松園盲人会の実践とその考察 国立ハンセン病資料館研究紀要第5号 国立ハンセン病資料館 2015年3月
- ハンセン病施設における点字の習得と活用を詳細に述べる
- 杉田正幸 公共図書館の視覚障害者雇用（点字受験等の配慮）を中心に ― 私（15年前）の公共図書館と国会図書館への点字受験を求める活動と2014年1月の滋賀県立図書館の点字受験を認めなかった問題から考える みんなの図書館（454）教育史料出版会 2015年2月
- 自身の就活経験を交えて、公共図書館の点字受験の対応の実態を解説する

- 川崎康男・関谷裕子・北川吉隆 誰もが絵本を楽しめる社会を目指して：点字つき絵本、てんやく絵本の過去・現在・未来 てんやく絵本ふれあい文庫 創設30周年記念シンポジウム こどもとしょかん (146) 東京子ども図書館 2015年
- 柏倉秀克 視覚障害生徒に対する情報保障 ― 点字教科書の編集に着目して ― 日本福祉大学研究紀要 ― 現代と文化第130号 日本福祉大学福祉社会開発研究所 2014年9月
- 文部科学省著作点字教科書 社会科の編集作業についての解説
- 白井康晴 統一英語点字 (Unified English Braille) について 筑波技術大学点訳ネットワーク平成26年度研修会資料 2015年3月
- UEB 英語点字になると、どういう点が変更になるかについて具体的に解説した資料
- 柴田陽子・池田明子 低視力の児童の視覚を活用した読み書き指導の事例報告 ― 点字と墨字を併用した学習指導の取組 弱視教育 53(1) 日本弱視教育研究会 2015年6月
- 弱視児童の使用文字について、点字だけでなく、墨字も使い本人の理解が深まったという取り組みの事例報告
- 樋口正見・小林秀之 他動スライディング法による点字導入期における指導実践 筑波大学特別支援教育研究第9号 筑波大学特別支援教育研究センター 2015年3月
- 点字導入期の指導法の一つである他動スライディングの有効性を検証
- 野澤しげみ・長岡英司・田中直子・富田彩・宮城愛美・小野瀬正美・納田かがり 「視覚障害者用 EPUB ブラウザⅡ」の開発と試用 ― EPUB ファイル内の点字データをピンディスプレイに出力する機能の実装 ― 筑波技術大学テクノレポート Vol. 22(2) 筑波技術大学学術・社会貢献推進委員会 2015年3月
- 点字を表示できる EPUB ブラウザの開発
- 梅田由紀恵・菅野亜紀・池上峰子・関口紗代・大田美香・松浦正子・熊岡穰・前田英一・高岡裕 点字文章表現に適した構文構造の解析 電子情報通信学会技術研究報告 (福祉情報工学) 114巻217号 電子情報通信学会 2014年9月
- 点訳に使う簡潔な文章を自動作成するプログラムの検証
- 秋元美晴・河住有希子・藤田恵・浅野有里 障害者の権利保障と日本語能力試験点字冊子試験の合理的配慮に関する一考察 恵泉女学園大学紀要第27号 恵泉女学園大学紀要委員会 2015年2月

- 日本語能力試験の点字化配慮についての解説
- 藤田恵・河住有希子・秋元美晴 内容と用途に応じた点字冊子の留め具と綴じ方に関する一考察：日本語能力試験（JLPT）点字冊子試験の問題冊子を用いた触読調査から 日本語教育方法研究会誌 Vol. 21 No. 2 日本語教育方法研究会 2014年9月
- コンピュータ用紙で出力した点字冊子を製本するリング等についての比較検討
- 近藤一由・金俊完・横田眞一・枝村一弥 点字表示セル用 ECF マイクロアクチュエータ 山梨講演会講演論文集2014 一般社団法人日本機械学会 2014年10月
- ECF ジェットという新技術による点字セルの開発
- 李揚・渡辺哲也 上面可動・ラッチ式による点字ピン制御機構の試作 電子情報通信学会技術研究報告（福祉情報工学）115巻98号 電子情報通信学会 2015年6月
- ピンではなく、ピンの周囲が上下する点字ディスプレイの試作
- 仲正幸・大武信之 点字古書の EPUB 電子化 国際経営・文化研究19(1) 国際コミュニケーション学会 2015年3月
- word のアドインによって点字を OCR で読み取ったあとのカナ訳自動化機能の実装。英文や数式にも対応
- 伊藤祥一・藤澤義範 ウェアラブル点字リーダーの開発 情報処理学会第77回全国大会講演論文集 情報処理学会 2015年3月
- 指先に付けたセンサーで点字を読み取り、音声で読み上げるシステム
- 蓑田豪・亀山啓輔 スマートフォンを用いた点字認識システムの構築 2015年電子情報通信学会総合大会講演論文集 一般社団法人電子情報通信学会 2015年2月
- スマートフォンで点字読み取りをするための基礎的研究。実験用の合成画像で検出精度を検証
- 元木章博 点字鏡像関係の直観的理解を助けるアニメーションの最適化に関する考察 鶴見大学紀要第52号 第4部 人文・社会・自然科学編 鶴見大学 2015年3月
- 点字パターンの凸面と凹面をアニメーションで理解させる画像の作成
- 元木章博・柳澤靖夫・黒川萌香 鏡像関係の理解に向けた点字学習支援システムの開発と評価 電子情報通信学会技術研究報告（福祉情報工学）114巻512号 電子情報通信学会 2015年3月
- 点字パターンの凸面と凹面をアニメーションで提示することでの、点字初学者の誤答の減少について報告
- 新井直之・上條莉奈・伊藤祥一・藤澤義範 点字初学者のための学習支援機器の開発 情報処理学会第77回全国大会講演論文集 情報処理学会 2015年3月

→ 3cm 程度の点字牌に磁石を仕込み、センサ上に置くと読み上げる装置の開発。
ゲーム感覚で点字を学べる

山崎純 UV オフセット印刷技術を用いた点字印刷及び触図印刷の開発と普及 第40
回感覚代行シンポジウム 感覚代行研究会 2014年12月

→ 紫外線硬化樹脂インキを使った新たな印刷技法による点字・触図印刷の応用範
囲についての展望

犬塚俊裕・青柳まゆみ 立体コピーによる愛知県地図の作製とその評価：画像編集ソ
フトを用いた原図作製の試み 障害者教育・福祉学研究第11巻 愛知教育大学障害
児教育講座 2015年3月

→ フォトショップを使った立体コピー原図を作成したことから得た知見。点字フ
ォントに言及する箇所あり

山崎隆大・渡辺哲也 立体コピー上の触知点記号の大きさ弁別に関する研究 — 盲人
と晴眼者の比較 電子情報通信学会技術研究報告(福祉情報工学)114巻512号 電
子情報通信学会 2015年3月

→ 直径の異なる9種類の点記号を立体コピーで作成し、晴眼者と視覚障害者で弁
別実験を行った。閾値が0.5mm から0.7mm であることを確認した

橋本孝博・渡辺哲也 立体コピーの膨張に影響を与える要因の検討 電子情報通信学
会技術研究報告(福祉情報工学)114巻512号 電子情報通信学会 2015年3月

→ 立体コピー現像時の熱量を変化させることで、膨張の高さの変化を検証。目盛
7以上で、0.3mm 以上の高さになることを確認した。

渡辺哲也・山口俊光 触地図自動作成システムの活用：触地図作成サービスの実践と
新しいシステムの開発 電子情報通信学会技術研究報告(福祉情報工学)115巻193
号 電子情報通信学会 2015年8月

→ 2010年から行ってきた触地図作成サービスの事例を整理し、分かりやすい触地
図の要件と活用できる利用者層について考察。さらに新システムの概要を紹介

佐藤将朗 点字の読みやすさに関する心理学的研究 — 触読材料の量的拡大に伴う熟
達者と未熟達者の触読時間の分析を中心として — 筑波大学学位論文博士(障害
科学) 2015年2月

→ 点字パターン^{つとむ}の外的形状に着目した読みやすさに関する研究

森まゆ 点図の直線の読みとりやすさに関する実証的研究 筑波大学学位論文博士
(障害科学) 2015年3月

→ 点図における直線表現の研究。実線から点線に転じる点間の値など

(文責：和田 勉)

日本点字委員会第51回総会並びに研究協議会報告

2015年6月6日（土）～6月7日（日）、日本ライトハウス情報文化センターにおいて第51回総会並びに研究協議会が行われた。委員22名、事務局員5名、会友3名、オブザーバー等31名、計61名の出席があった。

総会

(1) 委員の交替、および事務局員の委嘱について

盲人社会福祉界代表委員・植村信也氏（日本点字図書館）が退職したため、佐賀善司氏（岩手県立視聴覚障がい者情報センター）に交替した。事務局員として花田和枝氏（京都ライトハウス情報製作センター）が会長より委嘱された。

(2) 2014年度事業報告・決算報告、各地域委員会報告、「日本点字表記法」検討委員会報告、英語点字特別委員会報告、2015年度事業計画・予算などが討議され承認された。

(3) 「日本点字表記法」編集委員会の設置を承認した。

(4) 日点委のメーリングリストについて

特別委員会やホームページ担当者間のメーリングリストを、日点委のドメインで作成し、その運用管理を、ホームページの開発および保守を委託している業者に委託する。

研究協議

1. 「統一英語点字の日本への導入に関する第二次答申（一般日本語文章中の英語の語句や文の表記）」について提案され、承認された。

要旨：現在、点字使用者の大多数は従来のアメリカ式英語点字表記に慣れ親しんでおり、「一般日本語文章」中の英語の語句や文については、原則としてアメリカ式に準じた表記とするのが望ましい。

2. 文中注記符について（近畿点字研究会）（継続議案）

「文中注記符と句読符・カギ類・カッコ類・指示符類等の順序」、「文中注記符の行移し」、「文中注記符は該当語句の前か後か」、「一定範囲について、語釈を先にまとめて提示するレイアウトについて」などが提案された。

3. 「日本点字表記法」検討委員会からの答申について

《検討結果を第1章～第5章にわたり、『日本点字表記法 2001年版』の章・節・項目に添って記述する。「2001年版」には多くの課題があることを再確認した。》 答申「まとめ」の《この検討結果を活かし、よりよい「表記法」とするために、「表記法」の改訂が必要であるという点で委員の意見が一致した。》件について、承認された。

4. 「表記法」第3章第2節の一部変更についての提案(宮村健二)

「2. の本則について」「3. の本則について」「4. の注意2について」提案があった。「表記法」の見直しがなされるときに検討するとともに、各地域の活動の中でも検討を深める。

5. 外文字を用いるか、外国語引用符を用いるか判断に迷う事例の検討（近畿点字研究会）

《近年、日本語文章中においてアルファベットが頻出するようになってきたことから、現在の『日本点字表記法 2001年版』2章3節9. の【注意1】「略称と単語との区別がつきにくい場合などでも、外文字を前置して書き表してもよい。」という規則だけで処理することは困難であることを指摘してきた。今回は、各地の早急なるご検討を促す目的で、事例の収集と整理を行い、お示しする。①一見単語のように見える造語や固有名詞、②日本語の中で一部の文字をアルファベットで表す場合、③略称ではなく、単語の役割を果たす語を含む場合、に分けて検討する。「表記法」2章3節9. の【注意1】の規則を「略称と単語との区別がつきにくい場合や、略称と単語の両方の性質を持つ場合などには、外文字を前置して書き表してもよい。」とすることを検討願いたい。》（継続審議）

6. 「第3章表題変更と、内容の一部修正・追加」（木塚泰弘）に基づいて提案が行われた。編集委員会の中で検討する。

編集後記

お変わりありませんか。「日本の点字 第40号」をお届けします。

巻頭言「点字と私」(坂井仁美さん)。点字というのは、人との「関わり」だと教えられます。ご両親との関わり、生徒との関わり…。坂井さんが今関わっておられる教科書編集も、入試点訳事業部も、日点委も、すべて、今日の前にいる生徒との関わり、生徒への還元、という中でとらえておられると思いました。

「日本における英語点字の表記について」(日本点字委員会)。統一英語点字(UEB)の日本での取り扱いについて、日本点字委員会第50回(2014年)・第51回(2015年)総会において討議し、決定しました。外国語点字の表記法を、なんで日点委で云々するのか、と思われる向きもあるかもしれませんが、外国で決まった外国語の表記法を、日本ではどのように取り入れるのか、あるいは取り入れないのか、の指針を示したものです。主旨としては、日本における英語点字の扱いを大きく二つに分け、「英語の教科書・試験問題等」には原則としてUEBを導入するが、「一般日本語文章」にはUEBを原則として導入しないこととする、ということです。ご参考にしていただけるとよいと思います。なお、日本語文章中において、外文字を用いたアルファベットの書き表し方については、変更はありません。

「小学校の教科書で点字はどう扱われているか」(加藤三保子さん)。子どもたちは、「凸字の実物はどこで見ることができますか?」「結び文字はどのように読むのですか」などという質問をするのですか。うーん、難しいですね。本稿は、小学生は「点字」やその周辺のことをどのように学んでいるのかを知るために、点字が小学校の教科書でどう扱われているのかを調べたものです。あわせて、視覚障害に関する教材についても調べています。この調査報告は、2015年4月25日(土)、戸山サンライズにおいて開催された日本点字普及協会平成27年度総会・研修会において発表されたものです。すばらしい報告で、この場にいる人たちだけで聞かせていただくのは惜しい内容だと考え、本誌への執筆をお願いしました。その後の教科書の状況もふまえ、補筆していただきました。日点委の大切な働きとして、点字の普及ということがあります。

日点委と日本点字普及協会と手を携えて、点字の普及に努めていきたいと願います。

「Yahoo!きっず」というサイトがあって、小学校の調べ学習など教育の現場でも使用されています。「きっず検索ランキング2015年 みんながよく調べた言葉は？ ジャンル別ランキング 注目された人物は？」で、1位・ルイ・ブライユ、2位・AKB 48、3位・織田信長だったそうです。2015年12月、ポプラ社からコミック版世界の伝記③『ルイ・ブライユ』(漫画：^{むかいなつみ}迎夏生、監修：金子昭。編集協力：日本点字委員会・日本点字図書館)が発行されました。これもそうした流れの中で出版されたものだと思います。

図書紹介：なかの・まき著『日本語点字のかなづかいの歴史的研究——日本語文とは漢字かなまじり文のことなのか——』(金子昭)。今まで日本における点字の研究としては、心理学系の人たちによる点字触読の研究、工学系の人たちによる自動点訳システムなど言語情報処理の分野、視覚障害教育関係者による点字指導法の研究などが行われてきました。今回、文字論・表記論の立場から、点字かなづかいの歴史的研究が試みられました。新しい分野から点字の研究に参加していただけたことを喜びたいと思います。

日点委からのお知らせです。第51回総会において『日本点字表記法』改訂版編集委員会が設置されました。

『日本点字表記法』の検討については、今まで次のような経緯がありました。

(1)「日本の点字 第35号」〈特集 「点字表記法」のあり方を考える〉において、14名の方に「点字表記法」についての思いを書いていただきました(2011年)。

(2)「『日本点字表記法』のあり方」について委員会が設置され(2010年)、「答申」が提出されました(日本点字委員会第48回総会・2012年)。

(3)『日本点字表記法』検討委員会が設置され(2012年)、「答申」が提出されました(日本点字委員会第51回総会・2015年)。

これらは『日本点字表記法 2001年版』にどのような問題点があるのか、を検討しようという趣旨でスタートしたものであり、『日本点字表記法』の改訂を前提としたものではありませんでした。しかし上記(1)の特集、(2)の「答申」、(3)の「答申」に至る流れ、および各年度の総会並びに研究協議会の討議の流れを受け、『日本

点字表記法』を改訂する時期にあると判断し、ここに編集委員会の設置が提案され、承認されました。

設置期間は2015年6月より、新しい『日本点字表記法』の発行を目標とする2018年11月までとします。その途中において、「日本の点字」に、経過を報告し、広く意見を求める予定です。

2015年8月、日本点字委員会委員の田中徹^{てっし}二さんが書かれた『不可能を可能に — 点字の世界を駆けぬける』が岩波新書から発行されました。その中に、「第3章 点字大好き人間の使命、1 点字でつながる、日本点字委員会の結成」という一項目があります。日点委の創設に奔走した木塚泰弘さんの働き、当時の点字表記の状況、日点委の創設、「点字表記辞典」刊行の経緯などについて記しています。その他にも、日本点字図書館のこと、視覚障害者を巡る状況、人と人のつながりについて教えられる一書です。

読者の皆様、それぞれの場で点字のためにお働きのことと思います。ご活躍をお祈りいたします。

(金子昭)

日 本 の 点 字 第40号

2015年12月25日発行

発 行 日 本 点 字 委 員 会

〒169-8586 東京都新宿区高田馬場1-23-4

日本点字図書館内

電話 (03)3209-0671

FAX (03)3209-0672

振替口座 00100-1-42820

ホームページ <http://www.braille.jp/>

印刷所 コロニー印刷

〒162-0034 東京都中野区江原町2-6-7
